

海外散歩

珍虫ハンター としての海外旅行記

その3

珍虫ハンターの集大成

株式会社 スターラボ
佐藤 勝

航空トラブル

まだ記憶に新しい2024年の夏休み6泊10日で、私はアルゼンチンを拠点にした南米4ヶ国周遊を企画した。アルゼンチンに着き3日目は船による日帰りでウルグアイに行き4日目の昼食でこの国の名物となるアサドを食べて空港へ向かうと人が殆どいなくて静まり返っていた。

パラグアイ行のチェックインはと問いただすと、今日はこの空港全体がストでフライトは全てキャンセルだという。これには非常に困りすぐに翌日のフライトを手配しようにも満席でしかもオーバーブッキングしているという。パラグアイの後は元々1泊でブラジルのサンパウロを予定していたので余儀なくこの日はアルゼンチンの別宿で1泊し翌日はサンパウロへ1日前倒しで行く事になった。だけど、ストによる欠航は何の補償もなく、パラグアイの宿代は返ってこず、アルゼンチンとパラグアイの区間の航空代金も返金されず、更にアルゼンチンのホテル代も自費扱いとなった。アルゼンチンの現金も殆ど使い切っていたのでカードで支払い出来る空港の近くに宿を探すもその宿はレストランもなく周りに何もないホテルだった。夕食を食べたとしてもカードの使える店とも限らないし、夕食に現金を使ってしまうと空港までのタクシー代もなくなってしまうのでこの日は我慢して目の前にあった公園で桑の実を食べて飢えを凌ぐ事となった。アルゼンチンが初夏の時期だったのでタイムリーに桑の実があったのは天の恵みと思うしかないが何でこんな目に遭わなければならな

いのかと思ったし一番悔しかったのは、ここから2時間のフライトで未だ行ったことのないパラグアイへ渡れなかった事だ。地球の裏に当たるこの地域アルゼンチンまでの道のりもかなり長かったしもうこんな遠くまで来る事は恐らくないし訪問国としてカウントもされず相当ショックを受けた。

この年の年末年始は憧れでもあったマダガスカルへ行く事が出来て、首都アンタナナリボの空港で荷物受け取りのターンテーブルで待っているも私の荷物が一向に出てこず、係員が経由地で搭載し忘れたらしい。翌日荷物は手元に戻ってきたが、初日はキャリーバッグなしでホテル滞在を強いられた。不便な滞在に加え翌日航空会社から電話がかかってくるも空港まで取りにきてほしいという。しぶしぶタクシー代まで払って引き取りは済ませたが空港職員のせいでまた余計なお金と時間を費やしてしまった。何も悪いことしてないのに時間とお金がかかるのは精神的にきつい。

それと過去に経由地アラブ首長国連邦で荷物置き去りではなく、私自身が置き去りにされて飛行機が飛び去ってしまった事件があった。これには補償がついたが補償に関係なく激怒した事をよく覚えている。気になる方は著書を参考にして下さい。

北マケドニアではカタル経由で日本へ帰国予定でチェックインと保安検査も済ませて搭乗待合室で待っていると、成田は前日台風直撃で欠航となり貴方の予約はオーバーブッキングの対象にもなった為予約は抹消されたと知らされ、北マケドニアの出国

審査は取り消されこの地でもう1泊する事になった。但し、ストップオーバー制度による経由地カタルで1泊する予定でカタルの宿を予約していたのにそれも無効になった。カタルまでは普通にフライトはあったのにその路線まで強制的に抹消されたし、勝手に決めつけられた事に心外を感じ執拗に抗議するも覆らず、また余計なお金と時間と貴重な有給まで奪われてしまった。

この他、バーレーンでは入国審査時、偽造パスポートと疑われ別室で2時間尋問と荷物検査を徹底的にされたが疑いが晴れても謝罪もお詫びも一切なくただ、うんざり感と疲労がたまるだけだった。

南アフリカでは空港職員によるデジカメ窃盗の被害に遭い、米国マイアミでは乗務員が寝坊したせいで欠航し客全員に迷惑がかかったし、アイルランドではエンジントラブルで出発が3時間以上遅延し羽田に着いたのが夜中の1時半。この時間家に帰るまでの交通機関はなく、一睡もせず羽田からそのまま職場へ通勤した事もあった。

国の消滅と共通昆虫

地球温暖化という言葉は誰もが1度は聞いた事があるだろう。日本は近年、猛暑日の回数が記録更新され酷暑で40℃超えの地域も多々出てきている。

まだ、行った事のない南極とグリーンランドの氷が解けて海面が上昇し、それにより海拔の低い国土が沈み、近い将来、国が消滅しその国の人々は他の国へ強制移住せざるを得ないという。移住候補の国として日本も挙げられている。そんな危機感のある国はツバルとキリバスである。私は国が消滅する前に行ってみたいと両方訪れた事があり、国そのものは共に一直線に伸びる長い道があるだけで、周りはサンゴ礁に囲まれ非常に綺麗な海で年中暖かい所である。

共に南太平洋の島国で短期滞在でもすぐに一周出来てしまう。目に付くのは椰子の樹を中心とした熱帯植物であるが国土が狭いせいか、植物が密集しているという感覚はなく、これらの熱帯植物を食べた



No.1 国土が細長い一本道のキリバス



No.2 左上シャミセンコイチャコガネ(ツバル産) 右上ハイイロハナムグリ(キリバス産) 左下ヨーロッパヤマクワガタ中型♂(スロベニア産) 右下ヨーロッパヤマクワガタ大型♂(ハンガリー産)

り棲み処にする昆虫も多くない。ツバルはシャミセンコイチャコガネを1匹捕獲し、キリバスはハイイロハナムグリを1匹捕獲しただけに留まった。実はこの2種は日本にも分布しており前種は夜の灯りに飛来する夜行性食葉群で後種は灯りに飛来しない昼行性訪花群の昆虫である。前種は沖縄の八重山諸島に生息するものの個体数が少なく国内で捕獲した事はないが、海外ではトンガ、フィジー、ワリス・フチュナ、セイシェル、コモロで捕獲した事がある。後種はパプアニューギニア、ハワイ、オーストラリア、国内の沖縄・多良間島で捕獲した。

ハイイロハナムグリは飛翔能力が長けていて国境を越えていけそうな位、勢いよく翔べるので生息域を延ばしている。事実、ハイイロハナムグリは元々日

本に生息していなかった種で移入種とされている。シャミセンコイチャコガネは海外においては珍しい数見付けはしたが、弱々しく飛翔するので世界あちこち特に自分が捕獲した実績から南太平洋とインド洋付近の国々へ流木や船に紛れ込んで分布域を拡げている可能性が高い。両種は太平洋諸国の暖かい国に生息しているのでサイパンとグアムにも生息している可能性があり、2025年4月に10年振り5回目のグアムへ調査に出向いたが結果は両種共見付ける事は出来なかった。最後に不謹慎ではあるがツバルが消滅してツバル人が日本へ移住する時に歌ってあげたい曲がある。それは谷村新司さんの昴(すばる)「我は逝く♪さらばツバルよ～」

また、不可解なデータとして東日本大震災があった2011年3月11日私はウズベキスタンに滞在していた。更に16年4月の熊本震災時にはキルギス滞在、24年元旦に起こった能登半島震災時にはルワンダに滞在中であった。大震災時に日本に滞在していないことから、将来的に自分だけ大震災に遭わずに助かるとか、私が海外に行くと大震災が起こるから行くな!と言われて嫌な経験を保持している。

総合的に好きな国

これだけ多くの国へ出向いているので「どこの国が1番良かった?」とよく聞かれる。でもその都度返事に困ってしまう。これは多くの国へ行った事に自惚れて好きな国を決めつけられないという意味ではない。自身は昆虫が沢山採れる国が1番良いと思うのだが、質問者は衣食住を知りたいらしい。

私は基本、2泊で帰国出来るような中国、韓国、グアム、フィリピン以外を除けば行った事のない国へ出向くタイプでリピーターではない。質問者の「1番良かった国=好きな国は?」に総合的に応えるのであればフィジー共和国をお勧めする。まず、自分自身の好きな昆虫採集をするに当たってもこの国は昆虫の宝庫であり数種類の昆虫を採集出来た事、主食のタロイモ料理や魚が美味しい事、気候も暖かく穏やかで離島の海は綺麗である事、治安は夜のナンディを一



No.3 フィジー産の昆虫



No.4 一息入れようジョージアで ああ男の安らぎ

人歩きしなければ問題ない事、英語も通じ建物もしっかりとしていて住み心地が良く物価も日本より安いという理由である。但し、私はフィジーに長期滞在した経験がない。けれども、南太平洋の国々へ出向くのに空の玄関口であるフィジーの空港の利便性は抜群で平均すると南太平洋の国々へ行くには週2便しかないフライトにタイミングを合わせる為にフライトを待ち、1回の旅行でフィジー滞在は強制的に2、3泊しなければならない。そんなこんなでかれこれ5回以上フィジーを訪れて行先によっては西のナンディ空港と東のスバ空港両方利用する事になるので、フィジー国内を時間潰しの為に一周したり、植物園や爬虫類園もありアミューズメントも充実している。

他に、「新しい国や名前が変更になった国へは行かないのか?」と聞かれるが、新しい国とは南スーダン

だが治安が非常に悪いので渡航はあり得ない。

スワジランドはエスワティニと名前が変更され、パスポートの出入国スタンプは気になるが、魅力もなかったスワジランドへは2度と行かないであろう。グルジアはジョージアと名前が変更になってから行った事がありこちらは空中都市が魅力で丘からの街並みが綺麗に映えているので好きな国の候補に入っている。

これからの目標

日本の南大東島で1999年に捕まえたヒサマツサイカブト♂を新種として発表したのが2003年。今の所♂はこの1匹のみしか発表されておらず絶滅危惧種にもなっており自身2004年に追加個体を採りに南大東島へ出向くも空振りに終わった。そこ以外の国内でも毎年昆虫採集しているがヒサマツサイカブト以外の新種発見には至っていない。論文でヒサマツサイカブトの比較個体になったグヌサイカブトを探しにボルネオ島へも行ったがこれもまた空振りに終わっている。運やタイミングはあるがシャミセンコイチャコガネのように日本にもいる種が海外にいたり、亜種である可能性は高いが特に韓国、中国、ロシアでは日本と全く同じ種が生息しているので個人的にはそれらが採れたとしても興ざめしてしまう。日本から離れた遠い国へ行けば行く程、日本の種がいなくなっていくのか或いは完全にいないのか未知である。

海外で採れた昆虫が明らかに日本に生息していないと一目で判ったのは巨大なカミキリムシや、メタリック色をして鮮やかな光沢のある美しいクワガタやカナブンである。クワガタに関しては種類も豊富で梯子のようなスリムな体系をした個体や大顎が発達した鋏で挟まれると間違いなく大怪我をするようなごつい種類が海外に生息している。国内で1番好きな虫はミヤマクワガタであり、スロベニアでヨーロッパミヤマクワガタペアが採れた時は最高の気分であった。

現在、私は50歳未婚で18歳から標本コレクションを始めて138ヶ国到達している。著書に掲載した101



No.5 ベルー産の巨大なカミキリ



No.6 サイのような角がある新種ヒサマツサイカブト♂

ヶ国目の国では「迷わずに～SAY YES♪」と答えてプロポーズの代わりにガッツポーズをしたが、2024年は結婚を予定して新婚旅行は海外と決めていたが破局してしまった。

これまでは新婚旅行を最後に海外旅行と昆虫採集は引退して最後に完結編の著書を出版しようと目標を掲げていたのではあるが、昆虫や海外旅行が好きな伴侶と出逢えるならば、引退せず結婚後も一緒に未だ行ってない国へ出向けたらなと思っている。

(日動協ホームページ、LABIO21 カラーの資料の欄を参照)